

うるぎトライアルRUNボランティア参加者の意識調査
—期待度と満足度の比較—

大 勝 志津穂

愛知東邦大学

うるぎトライアルRUNボランティア参加者の意識調査 — 期待度と満足度の比較 —

大 勝 志津穂*

目次

1. はじめに
2. うるぎトライアルRUNとボランティア
3. 調査方法
4. 調査内容
5. 分析方法
6. 調査結果
 - (1) 個人的属性
 - (2) ボランティアの参加動機
 - (3) ボランティア参加の期待度と満足度
 - (4) 満足度と期待度の差
 - (5) 再参加意向
7. まとめ

1. はじめに

全国各地で開催されるマラソン大会では、参加者の募集とともにボランティアの募集も行われ、近年、スポーツイベント運営にはボランティアは欠かせない存在となっている。2020年の東京オリンピック・パラリンピック大会では、大会を支えるボランティアとして8万人が予定されている。山口（2004）によると、スポーツ・ボランティアは、大きく2つに分けられる。ひとつは日常的に地域スポーツクラブやスポーツ団体において活動する「クラブ・団体ボランティア」である。もうひとつは、地域における市民マラソン大会や運動会、さらには国体や国際大会において大会を支える「イベント・ボランティア」である。イベント・ボランティアには、審判員や通訳、医療救護、データ処理など専門の技術が必要な「専門ボランティア」と、特別な技能や知識が不要で、誰にでも容易に関わることができる給水・給食、案内・受付、記録・掲示、運搬・運転などを行う「一般ボランティア」がある。

笹川スポーツ財団のスポーツライフ・データ2016によると、スポーツボランティアの実施率は6.7%であり、実施希望率は13.9%となっている。具体的な実施内容では、地域のスポーツイベントでの「大会・イベントの運営や世話」が49.5%と最も高くなっている。実施希望率も地域の

* 愛知東邦大学経営学部

スポーツイベントでの「大会・イベントの運営や世話」が最も高く54.7%の人が今後行ってみたい活動内容としてあげている。このように、スポーツボランティア実施者の中でのイベント・ボランティア実施の割合は高く、実施希望率も高い（笹川スポーツ財団、2016）。また、イベント主催にとってもイベント開催においてボランティアの存在は必要不可欠である。しかし、スポーツボランティア全体の実施率は横ばい状態であり、直近の調査では減少傾向にある。今後、スポーツボランティアの育成・養成は、スポーツイベント開催に向けて重要な課題となっている。

スポーツボランティアに関する研究をみると、これまで、ボランティア登録者に対する調査（二宮、2017）や全国調査のデータ分析（山口、2015）、笹川スポーツ財団の定期的な調査により、スポーツボランティアの活動実態は明らかにされてきた。また、松村ら（2013）は、神戸マラソンのボランティア参加者について、参加動機や参加への期待と参加後の満足について明らかにし、今後ボランティア参加者をマネジメントするための課題を明らかにしている。このような研究結果から、ボランティアを統括する組織の必要性やリーダー育成の重要性が唱えられ、ボランティアをマネジメントする組織も増えてきている。文部科学省は2015年に「スポーツボランティア・運営ガイドブック」を発行し、イベントにおけるスポーツボランティアの役割や主催者側の意識改革の必要性を示した。しかしながら、地域のスポーツイベントは多種多様であり、そこに関わるボランティアのマネジメントも地域特有の課題があると考えられる。そこで、本研究では、高齢化が進み、地域活性化のひとつとして実施されるマラソン大会に着目し、その運営に関わる地域住民のボランティアの実態を明らかにすることを目的とした。

2. うるぎトライアルRUNとボランティア

本研究で取り上げるスポーツイベントは、長野県売木村で開催されるうるぎトライアルRUNである。売木村は、平成29（2017）年度の総務省が行った国勢調査によると、人口584人、世帯数288の村である。人口割合をみると、15歳未満が66人（11.3%）、15-64歳が255人（43.7%）、65歳以上260人（44.5%）となっており、全国平均と比較しても高齢化率の高い村であることがわかる。このうるぎトライアルRUNは、長野県売木村に着任した地域おこし協力隊の重見高好氏が始めたマラソン大会である。売木村で開催されたマラソン大会は、2017年で4回目となる。2014年は「第1回売木村マラニック大会」、2015年には「うるぎ絶景マラニック大会」という名で開催され、2016年は「うるぎトライアルRUN」として「日本一過酷なフルマラソン大会」と銘打って開催された。2017年は2016年大会から始まった「うるぎトライアルRUN」の第2回大会となる。開催日は、2017年10月8日（日）であった。種目は、フルマラソン、ハーフマラソン、ノルディックウォーキングの3部門であり募集定員は250名である。

この大会のボランティアは、売木村の村民が一番の担い手である。前日と当日の運営補助として、売木村と教育連携をとる大学の学生も参加するが、公募の形で外部からボランティアの募集は行っていない。それは、このマラソン大会を村民と一緒に盛り上げたいと願う重見氏の思いからでもある。

3. 調査方法

村民ボランティアの方々には、2017年9月27日に開催されたボランティア説明会において直接配布し、大会終了後に回収する方法をとった。当日説明会に参加できなかった人については、実行委員会から配布していただくよう手配した。ボランティア参加者は約100名。当日の説明会には40名程度の人が参加していた。学生ボランティアへは、演習活動時に配布し回収する方法をとった。100票のアンケート用紙を配布し、回収数は24票（24.0%）であった。期待度・満足度に欠損のなかった有効回答数は21票（有効回答率87.5%）であった。

4. 調査内容

本研究の調査内容を表1にまとめた。個人的属性として、性別、年齢、職業、居住地、過去のボランティア経験、今回の活動内容をたずねた。参加動機は、18項目の中から当てはまるものすべてに回答してもらった。ボランティア参加前の期待度は、「社交」「学習・経験」「自己陶冶」「社会的義務」「達成」の5要素16項目について、4段階リッカートタイプ方式によって回答を得た。ボランティア終了後の満足度については、期待度と対応するように作成した。また、再参加意向については、「参加したい」「まあ参加したい」「あまり参加したくない」「参加したくない」の中から1つ回答を選んでもらった。

表1. 調査内容

変数	項目	尺度
個人的属性	性別、年齢、職業、居住地、過去のボランティア経験、今回の活動内容	
参加動機	社交 人との出会いや交流 参加者との交流	18項目の中から当てはまるものすべて選択
	学習・経験 新しい知識や経験、技能習得 日常では得られない経験	
	個人的興味 ボランティアに関心	
	自己陶冶 自己成長 知識や経験を生かす	
	組織的義務 会社や学校の活動の一環	
	社会的義務 人や社会、村の役に立ちたい	
	その他 気分転換	
	ランナーと交流	
	いろいろな人と出会い	
	社交 知人と一緒に参加 職場や学校の仲間と参加 他のボランティアと交流 自分の知識や経験を活かす	
学習・経験 新しい知識や経験を得る 社会的な視野を広げる 普段では得られない体験	2. あまり期待していない・やや不満足	
自己陶冶 自分自身の成長	3. まあ期待している・まあ満足	
社会的義務 ランナーの支え 地域社会に貢献	4. 非常に期待している・かなり満足	
達成 大会の盛り上げ 自分の能力の発揮 余暇を有効に過ごす 大会に自分が必要		
再参加意向	次回大会への参加意向	1. 参加したい 2. まあ参加したい 3. あまり参加したくない 4. 参加したくない

5. 分析方法

全体の傾向をみるために、各項目の単純集計を行なった。期待度については、4段階リッカートタイプ方式により回答を得たものについて、「非常に期待している」に4点、「まあ期待している」に3点、「あまり期待していない」に2点、「期待していない」に1点の得点を与え数値化し、平均値を算出した。満足度については期待度と同様に、「かなり満足」に4点、「まあ満足」に3点、「やや不満足」に2点、「不満足」に1点の得点を与え数値化し、平均値を算出した。

また、参加者個人の期待度と満足度の差を明らかにするために、対応のあるサンプルのt検定を行い有意な差があるか否かを明らかにした。

6. 調査結果

(1) 個人的属性

調査対象者の個人的属性を表2に示す。性別では、男性が76.2%と8割近くとなった。年代では、10・20歳代が57.1%と6割近くとなり、次いで、50歳代となった。職業では、学生が52.4%と半数を超えた。居住地では、売木村と売木村以外でほぼ半数となった。年齢、職業、居住地から、学生ボランティアと村民ボランティアがほぼ半数であることがわかる。過去のボランティア経験では、7割の人が何らかのボランティアを経験していることがわかった。今回

表2. 個人的属性(n=21)

	n (%)		n (%)
性別		職業	
男性	16 (76.2)	農業・林業	2 (9.5)
女性	5 (23.8)	公務員・会社員	4 (19.1)
		自営業	2 (9.5)
年代		学生	11 (52.4)
10・20歳代	12 (57.1)	無職・その他	2 (9.6)
30歳代	1 (4.8)		
40歳代	1 (4.8)	過去のボランティア経験	
50歳代	3 (14.3)	ある	15 (71.4)
60歳以上	2 (9.5)	ない	5 (23.8)
N.A.	2 (9.5)	N.A.	1 (4.8)
平均年齢:33.3歳(±19.7)		今回の活動内容	
居住地		交通誘導	10 (47.6)
売木村	10 (47.6)	総務	6 (28.6)
売木村以外	11 (52.4)	エイド	4 (19.0)
		N.A.	1 (4.8)

の活動内容では、ランナーの交通誘導や車の交通整理を担当した「交通誘導」が最も多く47.8%であった。次いで、大会本部の運営、記録や表彰などを担当した「総務」が28.6%となった。

(2) ボランティアの参加動機

ボランティアの参加動機について、18項目の中から当てはまるものすべてに回答してもらった。その結果、最も多かったのは「売木村のためだから」であり38.1%であった。次いで、「大会運営に貢献したいから」が33.3%となり、社会的義務に対する動機で参加した人が多いことが明らかとなった。また、「依頼されたから」「学校や会社などで参加することになったから」など組織的義務によって参加した人や「人との出会いや交流のため」のように社交のために参加した人も3割程度みられた。

一方、「自分の身につく技術や技能が得られるから」や「自分自身が成長したいから」は9.5%と最も低かった。すなわち、新しい技術や技能を習得したり、自分自身を成長させたりするためにこのボランティアに参加するというより、村のためや大会を成功させるために力を貸したいと考えて参加した人が多いことが明らかとなった。

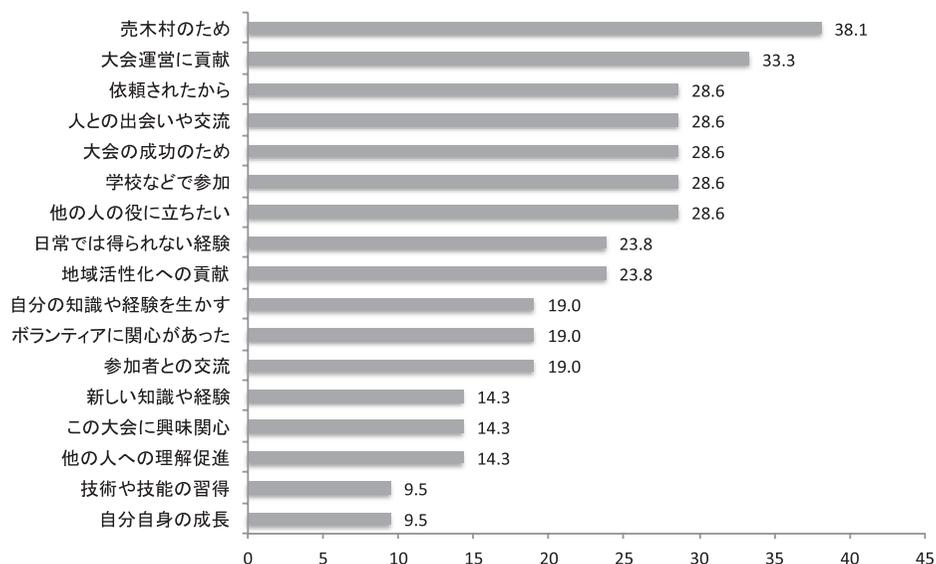


図1. 参加動機(n=21)

(3) ボランティア参加の期待度と満足度

ボランティア参加前に何に期待しているのかをたずねた(表3)。その結果、「地域社会に貢献できる」「いろいろな人と出会える」が最も高く3.38となった。次いで、「普段では得られない体験ができる」が3.19となった。一方、最も低い値を示したのは、「余暇を有効に過ごせる」であり2.14、次いで「自分の能力を発揮できる」が2.43となった。

次に、ボランティア終了後の満足度についてたずねた(表3)。その結果、「普段では得られない体験ができた」が最も高く3.62となった。次いで、「いろいろな人と出会えた」が3.38、「ランナーの支えになれた」が3.33となった。最も低い値を示したのは、「自分の知識や経験の活用」であり2.57、次いで「余暇を有効に過ごせた」が2.62となった。

「いろいろな人との出会い」や「普段では得られない体験」については、期待度も満足度も高い結果となった。一方、「余暇の有効な過ごし方」については、期待度も満足度も低いことが明らかとなった。満足度が低い値を示した「自分の知識や経験の活用」については、今回の参加者の活動内容の半数近くが交通誘導であったことが要因として考えられる。交通誘導は、ランナーの道を確保し、車を誘導するなどマラソン大会にとっては重要な役割であるものの、知識を活用する活動ではなかったためこのような結果になったと思われる。また、「余暇の有効な過ごし方」については、学生ボランティアは演習活動の一環として参加していたため、彼らの中では余暇というより授業として参加している意識が高かったものと考えられる。

表3. 期待度と満足度の平均値と標準偏差(n=21)

	期待度		満足度		t値	満足度-期待度
	mean	S.D.	mean	S.D.		
いろいろな人との出会い	3.38	0.74	3.38	0.81	0.00	0.00
地域社会への貢献	3.38	0.67	3.29	0.72	0.81	-0.09
普段では得られない体験	3.19	0.60	3.62	0.59	2.91**	0.43
大会の盛り上げ	3.14	0.66	3.29	0.85	0.90	0.15
ランナーとの交流	3.14	0.73	3.10	0.94	0.24	-0.04
自分自身の成長	3.05	0.97	2.86	0.96	0.81	-0.19
ランナーの支え	3.00	0.71	3.33	0.66	2.09*	0.33
社会的な視野の広がり	3.00	0.63	3.14	0.73	1.00	0.14
新しい知識や経験の取得	3.00	0.71	3.05	0.92	0.27	0.05
職場や学校の仲間との活動	2.67	1.02	3.05	0.97	1.90	0.38
他のボランティアとの交流	2.67	0.73	2.86	1.11	0.85	0.19
知人と一緒に活動	2.62	0.87	2.95	0.92	1.67	0.33
自分の知識や経験の活用	2.52	0.98	2.57	0.93	0.21	0.05
大会に自分が必要と感じる	2.48	0.87	2.86	1.15	1.71	0.38
自分の能力の発揮	2.43	0.87	2.95	0.92	3.20**	0.52
余暇の有効な過ごし方	2.14	0.91	2.62	1.02	2.50*	0.48

*p<0.05, **p<0.001

(4) 満足度と期待度の差

次に、満足度と期待度に差があるか否かを検定した(表3)。16項目中、期待度より満足度の高かった項目(「満足度-期待度」がプラス)は12項目、期待度より満足度が低かった項目(「満足度-期待度」がマイナス)は3項目であった(同値が1項目)。期待度より満足度の高かった項目が多く、参加者は概ね期待通り、あるいは期待を上回る満足度を得ていたと推測される。

t検定の結果、期待度より満足度が高かった項目の中で4項目において有意な差が認められた。有意な差が認められた項目は「自分の能力の発揮」「普段では得られない体験」「余暇の有効な過ごし方」「ランナーの支え」の4項目であった。「普段では得られない体験」は期待度も高かったが、それ以上に満足度も高かったことになる。「余暇の有効な過ごし方」「自分の能力の発揮」については、期待度は低かったものの、期待していたよりも満足を得ることができたと言える。

有意な差はみられなかったが、期待度より満足度が低かった項目について、今後のボランティア確保のために考えてみる。「自分自身の成長」に最も差がみられ、次いで「地域社会への貢献」「ランナーとの交流」となった。「ランナーとの交流」は、参加者がランナーと交流できることを期待していたものの、思った以上に交流ができなかったことを示していると思われる。「ランナーとの交流」については、エイドステーションでの交流が考えられる。実際に、エイドステーション担当のボランティアの満足度は、他部署のボランティアより高い傾向がみられる。しかし、全員がエイドステーションに配置されることはない。そこで、ボランティアスタッフがランナーと交流できたと感じられる方法として、ボランティアの声かけにランナーが応えることもあるのではないかと考える。沿道でのボランティアの声かけ、交通誘導係の声かけに対して、手を振ったり、返事をしたりすることでボランティアスタッフはやりがいを感じると思われる。小規模でアットホームなこの大会だからこそ、ランナーが大会を支えるボランティアへ感謝の気持ちを示すことができるのではないだろうか。そのことによって、村民がボランティアへ積極的に関わろう思うことができ、継続につながるように思われる。

(5) 再参加意向

次回のうるぎトライアルRUNへのボランティア参加について意向をたずねた。その結果、参加したい(「参加したい」+「まあ参加したい」)が6割近くとなった。

表4. 再参加意向

	n (%)
参加したい	6 (28.6)
まあ参加したい	6 (28.6)
あまり参加したくない	5 (23.8)
参加したくない	1 (4.8)
N.A.	3 (14.3)

7. まとめ

本研究では、長野県売木村で開催された「第2回うるぎトライアルRUN」のボランティア参加者を対象に、ボランティア参加の動機、ボランティア活動への期待度と満足度を明らかにした。結果は以下のようにまとめられる。

- 1) 参加動機は、「売木村のためだから」「大会運営に貢献したいから」など社会的義務の項目が高く、「自分の身につく技術や能力が得られるから」「自分自身が成長したいから」など学習や自己陶冶の項目は低かった。
- 2) 期待度で平均値が高かった項目は、「いろいろな人と出会える」「地域社会に貢献できる」「普段では得られない体験ができる」であった。平均値が低かった項目は、「余暇を有効に過ごせる」「自分の能力を発揮できる」であった。
- 3) 満足度の平均値が高かった項目は、「普段では得られない体験ができた」「いろいろな人と出会えた」「ランナーの支えになれた」であった。平均値が低かった項目は、「自分の知識や経験を活かした」「余暇を有効に過ごせた」であった。
- 4) 期待度より満足度が高かった項目は12項目であり、期待度より満足度が低かった項目は3項目であった(1項目は同値)。期待度と満足度の差に有意な差がみられた項目は4項目あり、その4項目すべてが期待度より満足度が高かった項目であった。これらのことから、概ね参加者は期待通り、あるいは期待以上の満足を得ていたと推測された。

期待度と満足度の差は、ボランティアのこの大会に対する評価とも考えられる。ボランティアが何に期待し、何に満足を得たのか。それは大会運営側の意図と同じだったのか違ったのか。特に、この大会のボランティアのほとんどは村民であり、村民と一緒にこの大会を盛り上げたいと願う実行委員会にとって、ボランティアの意識を知ることが重要なことだと考える。人口が少なく普段は静かな村にとって、このイベントで人口の半数ぐらいの人が来て騒がしくなることは大変なことであろう。しかし、村民にとっても、日頃触れ合うことのない人と出会えたり、多くの人をおもてなししたりすることは貴重な経験になるであろう。「普段では得られない体験ができる」「いろいろな人と出会える」「ランナーの支えになる」これらの効果を前面に出しながら、ボランティアとして関わってもらうとともに、小さな村の大会だからこそ、大会に参加するランナーにも村のことやボランティアのことを知ってもらいながら、大会を継続できるとよいのではないだろうか。ボランティアはランナーの支えになり、ランナーは支えてもらっていることに感謝

し、その関係がわかる大会であれば、村民ボランティアも継続して関わってくれるのではないだろうか。

最後に、本研究は、うるぎトライアルRUNのボランティア参加者の参加動機や期待度、満足度を明らかにすることを目的にアンケート調査を実施した。しかしながら、100名近いボランティア参加者に対し回収率が24%と低く、全体の傾向を示すまでには至らなかった。本来は、100名程度の参加者であれば、全員にアンケートに答えていただくことが望ましい。しかしながら、ボランティア参加者のほとんどが村民であり、高齢であるため回答していただくことが難しかった。人口が600名にも満たない村の100名近い人がボランティアとして参加するマラソン大会である。地域活性化のひとつとなるよう村役場も力を入れている。村人の期待や要望を可能な限り反映しながら、他の大会とは一味違うマラソン大会を運営してほしいと願う。

謝辞

本研究のアンケート調査に協力いただきましたうるぎトライアルRUNボランティア参加者の皆様、快くアンケート調査の実施を許可いただきました村長清水様や重見様、実行委員会の皆さまに深く感謝いたします。

参考文献

- 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会HP
<https://tokyo2020.org/jp/get-involved/volunteer/about/> (2018年3月20日参照)
- 松村浩貴, 土肥隆, 伊藤克広, 福田一儀, 舩越達也, 福本直子, 勝木洋子, 小野昌二 (2013) 第1回神戸マラソンのボランティア活動に関する研究—動機, 期待, 満足度に着目して—. 人文論集48, pp.55-70.
- 文部科学省スポーツ・青少年局スポーツ振興課 (2015) スポーツにおけるボランティア活動活性化のための調査研究 (スポーツにおけるボランティア活動を実施する個人に関する調査研究). 公益財団法人笹川スポーツ財団.
- 文部科学省スポーツ・青少年局スポーツ振興課 (2015) スポーツボランティア・運営ガイドブック～スポーツイベントのボランティアを知る～. 公益財団法人笹川スポーツ財団.
- 日本スポーツボランティアネットワークHP : <http://www.jsvn.or.jp/index.html> (2018年3月23日参照).
- 二宮雅也 (2017) スポーツボランティア個人に関する活動調査報告書. 特定非営利活動法人日本スポーツボランティアネットワーク.
- 二宮雅也 (2015) 日本スポーツボランティアネットワーク会員団体の登録者およびスポーツボランティア養成プログラム受講者に対するスポーツボランティア意識調査報告書. 特定非営利活動法人日本スポーツボランティアネットワーク.
- 笹川スポーツ財団 (2016) スポーツボランティア. スポーツライフ・データ2016—スポーツライフに関する調査報告書—. pp.102-106.
- 総務省 (2017) 平成29年住民基本台帳人口・世帯数, 平成28年度人口動態 (市区町村別).
- SSF笹川スポーツ財団 (2004) スポーツ・ボランティア・データブック.
- 山口康雄 (2011) スポーツボランティア団体の活動に関する調査. 笹川スポーツ財団.
- 山口泰雄 (2004) スポーツ・ボランティアの可能性. スポーツ・ボランティアへの招待—新しいスポーツ文化の可能性. 世界思想社. pp.1-14.

受理日 平成30年3月27日